

## 博士論文要旨

学籍番号	1217002	氏名	桐山啓一郎
論文題目	精神科スーパー救急病棟における患者の希望を反映した看護実践に関する研究		
目的：	<p>精神科スーパー救急病棟(以下、スーパー救急病棟)において患者の希望を看護師が把握し、その希望を反映した看護実践を通して、患者の希望に基づく看護のあり方を探求する。</p>		
方法：	<p>本研究は3つの研究から成り立つ。研究1は、研修先以外のスーパー救急病棟において実践されていた患者の希望を反映した看護実践を看護師への半構造化面接調査から明らかにした。研究2は、研修先のスーパー救急病棟に入院する対象者に半構造化面接調査を実施し、入院中に看護師から自分の希望を反映した看護実践を受けたか否かを看護の利用者の視点から明らかにした。研究3は、研究1と研究2を踏まえて、研修先であるスーパー救急病棟において、患者の希望を反映した看護を実践し、患者側と看護師側から評価した。なお本研究は岐阜県立看護大学大学院看護学研究科論文倫理審査部会の承認(30-A001D-2)を得た後に実施した。</p>		
結果：	<p>研究1:対象者3名から125の要約を抽出し、39サブカテゴリ、【患者の病状や疎通性をアセスメントして隔離中などできるだけ早期に希望を尋ねられるかの見極め】、【患者の希望は退院した直後についての内容】等10カテゴリを生成した。</p> <p>研究2:対象者10名から172の要約を抽出し、67サブカテゴリ、【看護師は自分に対応してくれないと思っている】【退院後の希望について看護師に伝えたい】等14カテゴリを生成した。</p> <p>研究3:スーパー救急病棟の看護師長と副主任をコアメンバーとし、研究1及び研究2の結果を踏まえた看護実践方法の考案及び看護実践方法の実施を経た後の更新を繰り返した。看護実践方法は患者11名に看護師6名に実践してもらった。看護実践方法は4回更新し、最終版は【中断しない面接の構築】、【対象者の傾向に合わせた面接】、【可能な限り早期から退院に関する希望を把握】等の5つであった。看護実践について対象者から〈退院後の不安への対策を獲得した〉、〈看護師の具体的な対応により薬を飲むよりも症状が落ち着いた〉、〈看護師に伝えたいことを伝えられ前の入院よりも満足度が上がった〉等の評価を得た。看護師の半構造化面接調査からは284の要約を抽出し、74サブカテゴリと、【従来の方法ではなく実践方法に基づき入院早期から希望を確認】、【看護師の想像する希望と患者さんの表出する希望の違いを発見】等17カテゴリを生成した。コアメンバーの半構造化面接調査からは181の要約を抽出し、31サブカテゴリ、【退院後の希望に焦点化したことによる有効性】、【患者さんが看護師とかかわりたいと表出するように変化】等12カテゴリを生成した。</p>		
考察と結論：	<p>対象者の希望は自分の人生をどのように生きたいか、生活者としてどのようにありたいかという内容であると考えられた。対象者の希望と看護師の想像する対象者の希望は異なっており、看護師には対象者の希望を把握しようとする姿勢が求められると考えた。スーパー救急病棟における対象者の希望を反映した看護実践のあり方は、対象者-看護師関係を構築した上で、対象者の精神症状を見極め、できる限り入院早期から対象者の希望を確認し、退院先の調整のみではなく退院後の生活を支援することであった。</p>		

(別記様式7)

番 号 :  
令和2年2月17日

## 令和元年度博士論文審査結果報告書

主 査 北山 三津子  
副 査 森 仁実  
副 査 黒江 ゆり子

令和元年度博士論文の審査及び最終試験を実施した結果は、下記のとおりです。

### 記

学籍番号：1217002

氏 名：桐山 啓一郎

審査結果： ①. 合格 2. 不合格 3. 保留

#### [審査結果要旨]

(1,000字以内)

論文題目「精神科スーパー救急病棟における患者の希望を反映した看護実践に関する研究」は、患者の希望を反映した看護実践方法の考案・実施・評価を通じて、患者の希望に基づく看護のあり方を探求した研究である。

第一段階では、患者の主体性を尊重した看護を展開している他施設の精神科スーパー救急病棟（以降、救急病棟と記す）看護師に面接し、「患者の希望は退院直後についての内容」が多く、「患者の病状や疎通性をアセスメントして早期に希望を尋ねられるか見極める」等の実践が抽出された。第二段階では、A精神病院救急病棟の入院患者に面接し、患者は「退院後の希望を伝えたい」と思っているが、「看護師は自分に対応してくれないと感じる」等の現状が確認された。第三段階では、前段階の結果を踏まえて看護実践方法を考案・実施・評価し、患者の傾向を把握した上で、中断しない面接機会を確保し、可能な限り早期から退院に関する希望を把握する等が看護実践方法として盛り込まれた。この実践方法で支援した患者からは、「看護師に伝えたいことが伝えられた」「退院後の不安への対策を獲得した」等、看護師からは「入院早期から希望を確認した」「患者が看護師と関わりたいと表出するようになった」等の評価が得られた。以上を通じて、救急病棟の入院患者が抱く希望は、自分の人生をどのように生きたいかという内容であり、看護師には患者の希望を把握する姿勢が求められるとした。さらに、患者－看護師関係を構築して患者の精神症状を見極め、できるかぎり早期から患者の希望を確認して退院後の生活を支援することが、救急病棟における患者の希望を反映した看護実践の在り方であると導いた。

審査委員会では、これらの取り組みは本研究科の倫理基準に基づいて実施されており、論旨が明確で一貫性があり、博士論文審査基準に適合するものであることを確認した。当該学生は審査委員会に4回出席し、主査・副査からの質問に答え、かつ直接指導を受け、最終試験に合格した。

以上のことから、本論文は博士論文として価値あるものと認める。